

■「場所・感覚・メディア」プロジェクトについて

——ある場所を訪れ、感じ、考え、テキストや写真、映像あるいは音響によって表し、伝えあう。そしてそれらが混じり合う空間の中でまた「場所」が生まれ、わたしたちの「感覚」も変容していく——

本プロジェクトではセンサリー(感覚)メディアとしての映像や音響による「場所」の表象を多角的に捉えなおし、あらたな芸術表現の可能性を探ってきた。芸術表現、ドキュメンタリー、映像人類学や現代思想等、様々な領域の制作者、研究者をゲストに迎えレクチャーやワークショップを開催し、実践的な活動として様々な場所でフィールドワークを重ね、作品制作を行い、変容していく私たちの「場所の感覚」について議論を重ねた。このような4年間の活動の最終年度となった2025年度は、フィールドワークや作品の鑑賞・議論、都市空間など場所に関する理論的な問題意識の共有を通じて、あらたな制作テーマを見出し、アート表現の可能性を模索してきた。ここでは、最終年度の取り組みについて網羅的に報告する。

2025年度のメンバーは以下のとおりである。

- ・教員：前林明次（主）、小林孝浩（副）、立石祥子（副）
- ・学生：北島慎也、武山弥央、山崎春蘭、芹澤碧、鄭健英

■フィールドワークの実施

以下の通りフィールドワークを実施した。

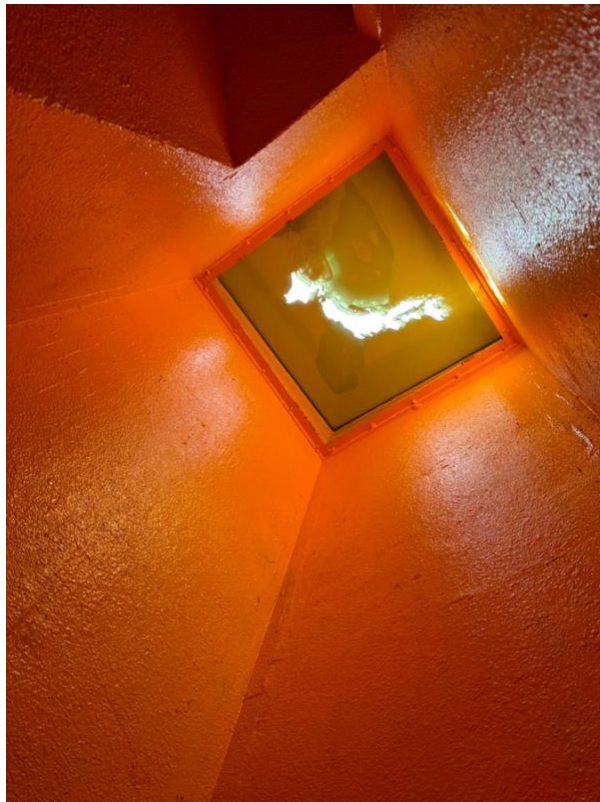
- ・IAMAS 旧校舎（2025年6月25日）



・金生山 (2025 年 7 月 1 日)



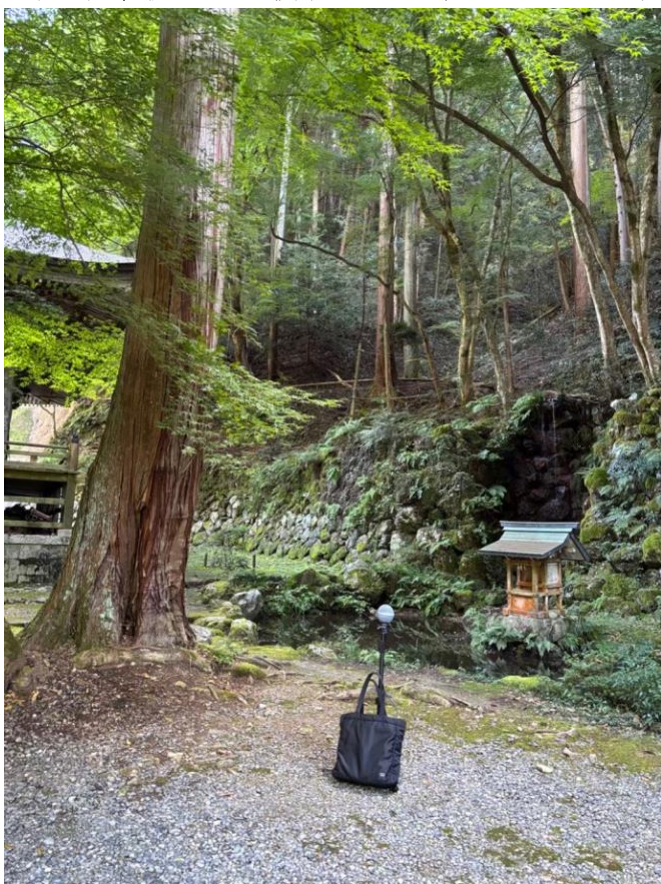
・養老天命反転地 (2025 年 10 月 8 日)



・農作業体験（2025年10月22日）



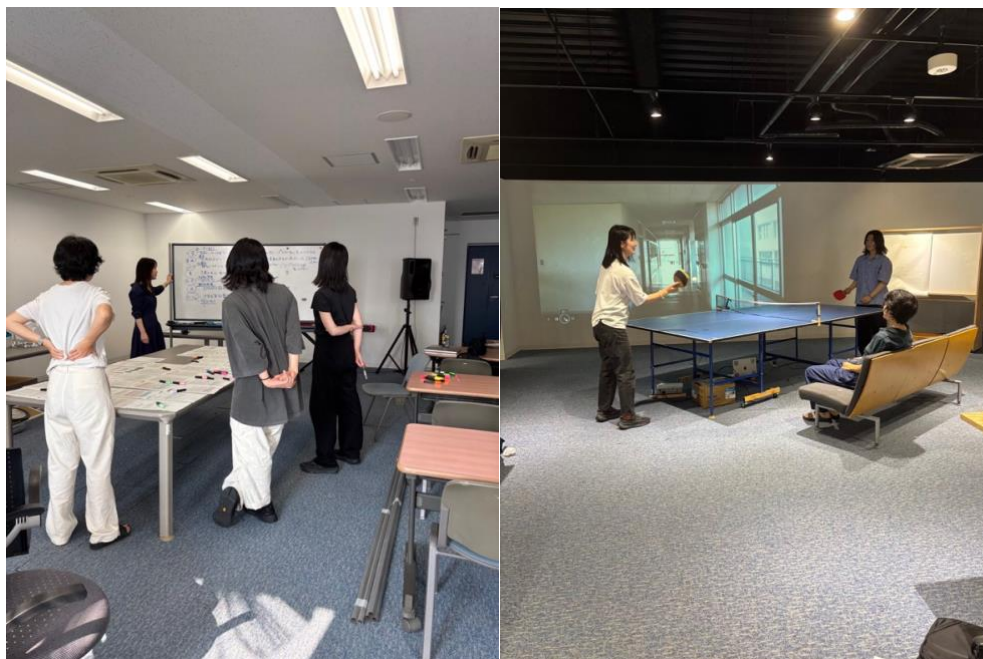
・谷汲山華嚴寺および横蔵寺でのフィールドワーク（2025年10月29日）



■オープンハウスでの制作とトークイベントの開催

オープンハウスでは、受講者3名が「場所・感覚・メディア」プロジェクトで得られた知見をもとにした作品制作をおこなった。

・北島慎也、武山弥央、山崎春蘭 《=IAMAS≠TIME》(2025年6月25日 於 W508)



また、学生による作品紹介を基軸として、「想起と記憶芸術」と題したトークイベントを実施した。

- ・発表：北島慎也、武山弥央、山崎春蘭 (修士1年) 「旧 IAMAS 校舎を起点とする場所の再解釈と表現」
- ・コメンテーター：前林明次 教授
- ・司会：立石祥子 講師

想起と記憶芸術

「場所・感覚・メディア」プロジェクト
トークイベント



本日の発表資料はこちらからダウンロードできます。

01	趣旨説明	15:00-15:05
	イベントの趣旨について説明します。	
02	「旧IAMAS校舎を起点とする場所の再解釈と表現」	15:05-15:15
	北島慎也、武山弥央、山崎春蘭 《=IAMAS≠TIME》(W508_DIにて展示)について発表します。	
03	「想起と記憶芸術をめぐる論点整理」	15:15-15:35
	立石祥子 想起と記憶芸術をめぐる論点を整理します。	
04	コメント	15:35-15:45
	前林明次 自身の制作した記憶芸術作品について紹介し、論点整理および学生の作品へコメントします。	
05	クロストーク	15:45-15:55
	「想起と記憶芸術」をめぐる登壇者がクロストークをおこないます。	
06	質疑応答	15:55-16:00
	会場から質問を受け付けます。	

発表：北島慎也、武山弥央、山崎春蘭 (修士1年)
コメンテーター：前林明次 教授 (研究代表者)
司会：立石祥子 講師 (研究分担者)
日時：2025年7月20日 (日) 15:00~16:00
場所：ワークショップ24 5階 W509カフェ

■プロジェクト展示の実施

「場所・感覚・メディア プロジェクト展示」(於：ギャラリー1・2、シアター)を実施した(2026年1月23日、1月26日、1月27日)。ここでは受講者5名がそれぞれプロジェクトでの活動を踏まえて作品を制作・発表した。

・**芹澤碧**《Here, But Not Here》: 鏡という目の前の人やその場所を反映するものが、その場所ではない他者の行動の影響によってその機能が失われていく作品。鏡に起きる結露から着想を得た作品。不可視の場所の情報や、その場所らしさの曖昧さを鏡という日常的な道具を通して問いかける。作品はIAMAS内の公共スペースに設置した。その対になるように自身の自宅の浴室というプライベートな場所の鏡が結露する状態になると 作品の鏡に白い映像が現れる。



・**鄭健英**《ここにいる、声》スピーカー／振動スピーカー／パチンコ台／声：パチンコは戦後日本において、在日コリアンが主要な担い手となった産業であり、社会的スティグマと不可分に結びついてきた。展示空間では、パチンコ台に取り付けた振動スピーカーから、作者のルーツに連なる人々の挨拶や呼びかけが流れる。周囲のスピーカーはパチンコ店特有の音響環境を再現し、声を遠くでは埋もれさせる。観客が台に近づいたときにだけ、声の輪郭が立ち上がる。この作品で見たいのは声の内容ではなく、聞こえない声の前で観客がどう振る舞うか。近づくか、離れるか、あるいは諦めるか。その選択そのものである。



・北島慎也《Auditory Commons——聴くことの共有地》「聞く／聞かれる」を再配線するプロジェクト：離れた場所にいる参加者たちは、スマートフォンに接続されたイヤホンを装着し、アプリケーションを通じて各自の環境音や声を送受信する。ただし音の結線（送受信先）は10-30秒で入れ替わり続け、相手はその都度ずれていく。その結果、送受信先が固定されないため、「誰の音か」を当てるのが難しくなり、関係の固定が成立しにくくなる。代わりに、断片的に流れ込む音を音場として受け取る聞き方へ切り替わっていく。変化するつながり方によって、相手が誰なのかという確定を先送りにする”短時間の自立性”を仮設し、その変化自体を提示する。



・山崎春蘭《Tide Lines》75分／シングルチャンネル／ステレオ：東京湾に現存する干潟で、干潮から満潮に至るまでの6時間にわたり、撮影者本人が波打際まで行って戻ってくるという歩行運動を繰り返す。鑑賞者は固定カメラによって捉えられるその往還運動を観察することを通じて、徐々に狭まってくる陸地、微細に変化する大気や風光を知覚する。そして潮の満ち引きという時間スケールをめぐる認知可能性を模索するという当初の意図は、偶発的なアクシデントによる視覚の枠組みそのものへの揺さぶりによって翻弄されていくこととなる。



・武山弥央《Chair for Untouchable Environmental Sound》: 私たちの日常生活は電気で溢れている。生活空間を模倣した場所で不可視の電磁場を、音と振動に変換することで、目には見えない関係性を聴覚/触覚で体感する試み。メディア装置《ambient friend》を媒介に、人の身体との演奏を通じて、私たちの生活環境を環境音として知覚し、すでに存在する外部との関係性を改めて喚起するためのインスタレーション作品を制作、実践した。日常的な椅子に座るといふ身体的行為が、環境と対峙させられる体験へと変容する。



■ IAMAS2026「プロジェクト研究発表会」

修了研究発表会「IAMAS2026」のプロジェクト研究発表会にて「場所・感覚・メディア」口頭発表をおこなった。受講者5名の制作した作品紹介および全体を通した主担当教員からのコメントがあった（2026年2月22日）。

- ・発表：芹澤碧、鄭健英、北島慎也、山崎春蘭、武山弥央
- ・コメンテーター：前林明次 教授
- ・司会：立石祥子 講師



■IAMAS 紀要の執筆

『情報科学芸術大学院大学紀要』に向けて『『場所・感覚・メディア』プロジェクト総括』を執筆した。

■授業における作品の鑑賞・体験と議論

以下のアーティストや作品についてディスカッションをおこなった。

- ・ルーシアン・キャストエヌ=テイラー、ヴェレナ・パラヴェル『リヴァイアサン』
- ・フランシス・アリス
- ・ポール・ポエット『外国人よ、出ていけ！シュリンゲンジーフのコンテナ』
- ・ピーター=リム・デ・クローン監督『オランダの光』
- ・ヴィンセント・ムーン《Take a way show》
- ・前林明次《Sonic Interface》

■場所の再魔術化をめぐるテーマのレクチャーと議論

以下のテーマについて担当教員がそれぞれレクチャーをおこない、受講者とともにディスカッションした。

- ・「社会劇という方法」
- ・「郊外」
- ・「技術の発展と生存」
- ・「世界の再魔術化」と「再アウラ化」について
- ・「都市の合理的再魔術化」
- ・「新宗教とメガチャーチ」
- ・「再魔術化する観光」
- ・「没場所性」と「リミナルな場所」について